

講演

「英語教科書の質的および量的分析」

小篠敏明（広島大学大学院教育学研究科）

この一連の研究は科学研究補助金の助成を受けて行った研究であり、最初に共同研究者についての紹介がなされた。研究の目的は、明治期から今日に至る日本の中等英語教科書を質的および量的に分析し、それぞれの教科書の特徴を明らかにすることである。しかし、教科書史研究は少なく、方法論についても乏しく、大変な時間と作業を要した研究であったとのことである。

質的には、(1)視点を定めて分類し、可能な場合計量化する分類法、(2)全般的に評する、概観、および、(3)教科書内容の解明、の手法を用いて、量的には、(1)使用語の出現頻度分析、(2)可読性(readability)の分析、(3)文法構造の出現頻度分析が行なわれた。分析に用いられた教科書資料は次の通りある。

- a Sanders, C.W.著 Sanders' Union English Readers Books 1-4, and 6 (1861-3) (Unionと略記、以下同様)
- b Charles J. Barnes 著 National Readers (1883, (National))
- c 文部省著『正則文部省英語読本』(1889) (『正則』)
- d 岡倉由三郎著 The Globe Readers (1907) (Globe)
- e 熊本謙二郎著 New English Drill Books (1907) (English Drill)
- f 増田 藤之助 著 The International Readers (1915) (International)
- g 神田乃武著 Kanda's Crown Readers (1916) (Kanda)
- h Harold E. Palmer 著 The Standard English Readers (1928) (P))
- i 竹原常太著 The Standard English Readers (1938) (P (T))
- j Jack and Betty (中学校1952) + New High School English

(高等学校)(1952)(Jack and Betty)

k Sunshine English Course (中学校+高等学校1996)(Sunshine)

これらの教科書は全てデジタル化され、読みとりソフトは WinReader PRO を、語彙分析では WordSmith Tools を可読性分析では Word の機能を用いられたとのことである。これらの研究の結果、文部省の『正則』は話しことばの教授に重点をおいた画期的なものであり、未習項目は採りあげず「積み上げ型」で作成した初めての教科書であり、以降の教科書の模範となったこと、受動態の出現頻度は文章の難易度に関係していることなど、多くの興味深い研究結果が報告された。

このようなパイオニア的な英語教科書の研究が発火点となり、今後多くの研究成果が発表されることを期待したいものです。

(古田八恵 四国大学)

公開授業

「YASUDA SYSTEM と eCALL による総合英語学習」

講師：平本哲嗣（安田女子大学）

まず公開授業会場となっている真新しく快適な PC 教室のデザインを担当の先生方でお考えになったということから講義が始まりました。数十台のコンピュータが設置される教室は、通常機能性が高く知的な雰囲気は与えても冷たさや圧迫感を学習者に与えてしまうことがあります。ところが、ここ安田女子大学の PC 教室では一歩足を踏み入れると同時に不思議に安らぎを感じさせるものがあります。学習前に緊張感を与えてしまわないように、PC テーブルに木目素材を使われ、学習中には快適に打ち込めるよう、広い作業スペースを確保し、なるべく視界を遮らない機械の配置、そして目の保護のた

め液晶画面を採用などの気を使われた設計を依頼されたということです。教室環境のデザインからシステム構築まですべてを担当の先生方が学習者の視点に立って行われたという肌理細やかな配慮はこの YASUDA SYSTEM に体现されているようです。

このシステムは学習者に優しい機械であるのみならず教授者にとってもやさしい設計となっており、教卓のタッチパネルの操作で学生個人または全体の学習状況を手に取るようにモニタすることが可能で、個々の学生への対応の質の向上を実現化するものとなっています。

英語を専門とする 1 年生を対象とした「英語表現研究 I,II」「総合英語 I,II(速読速聴)」などの事例紹介として、1) QM システム利用語彙学習、2) 教材一斉配布 / 回収、3) サット選択、4) サット英作をデモおよび当日のみの ID を配布頂き実際に PC 操作をさせて頂きながら体験させていただきました。1) に関しては、問題作成から始まり、学生が行う予習教材を手元実際に単語テストを受け、2) では配布プリントをもとに入力したデータをファイル転送して提出し、3) 4) でも実際の問題に取り組ませて頂きました。語彙レベルからリスニング、リーディング、英作までまさに総合的な指導を叶えるシステムです。

このシステムは、学生の週 2 回授業以外に何度も納得がいくまで使いたいという希望をかなえ、判らないところを何度でも聞くことができるなどの満足度が高い環境となっており、学習動機づけに有用なものとなっているということです。このような問題作成を教師のページからプログラミング知識なしでも行えるよう開発されたものが YASUDA SYSTEM と名づけられたこの教材システムです。デモ後に、参加の先生方からの有意義なアドバイスや質問が飛び交い、このシステムで勉強してきた参加学生からは満足の声が届き、有意義な公開講義が閉じられました。

(倉本充子 広島国際大学)

シンポジウム

「小学校における英語活動を巡る諸問題と今後の展望」

コーディネーター：横川博一（京都外国語大学）

パネリスト：

四方万二（小学校英語教育研究会代表）

小西千鶴子（同志社女子大学・非）

井狩幸男（大阪市立大学大学院）

このシンポジウムは、LET 関西支部「早期英語教育研究部会」の企画によって行われた。まず、コーディネーターの横川博一氏から、2002年度から本格化した小学校における「英語活動」における現状をふまえた上で、早期英語教育の理論的な背景も視野に入れつつ、今後「なにができるか」「どこまでできるか」を具体的に議論することが、このシンポジウムの趣旨であることが説明された。

最初のパネリストとして井狩幸男氏が、言語獲得理論の立場から、小学校における「英語活動」のあり方について母語の獲得研究もふまえた指導方法と、今後、予想されるであろう問題点が提示された。幼児の言語獲得過程は、五感や体の動きをともなった直接経験に基づく言語情報の利用が、やがて直接と間接から得られた情報とその他の関連情報の活用へと移行するという理論が示され、従って、小学校での英語活動においては、ことばの形式よりも意味のやりとりを重点を置き、リズムカルなもの、体全体をつかった指導法を工夫するなどの具体的な指導方法が述べられた。しかしながら、実際の教育現場では、クラス担任と TT、あるいは ALT の役割分担の問題や

適切な教材や指導方法がまだまだ試行錯誤の状態であることなども指摘された。

次に、四方万二氏は京都の小学校において実際の英語指導者の立場から得た知見をもとに、小学校における英語活動の現状を紹介された上で、中学校や高校における英語教育とは違った視点を持つ必要性を述べられた。また、担任と ALT との授業連携における問題には、児童英語の専門家を交えてのワークショップや具体的なレッスンプランの構築が重要であることも示唆された。そして、小学校と地域との連携が今後の英語活動にとって不可欠であることも付け加えられた。

高校、大学での教鞭も執られながら児童英語講師養成指導について豊富な経験をお持ちである小西千鶴子氏は、Nunan や Asher の理論に基づくご自身のティーチャートレーニング実践の様子を手振り身振りを交えて報告された。具体的には、子どもの発達段階とレベルに応じた内容と指導法の必要性、TPR(Total Physical Response) の効果、生徒への適切なフィードバックの重要性などを強調され、児童英語指導には、何よりも指導者側の創造性と想像力、柔軟性や順応性が必要であることも述べられた。

最後に全体のまとめとして、子どもにとって「言葉」とはどのような意味を持つのかという問題提起とともに、日本語と外国語の語彙習得の問題、すなわち L2 (第二言語) に目を向けることが、L1 (母語) への意識を高めることにつながるという井狩氏からの説明に、今後の早期英語教育の進むべき方向を改めて考えさせられ、たいへん有意義なシンポジウムであった。(小山敏子 大谷女子短期大学)

研究発表・実践報告 1 - 1

「Graded Readers を使って - 英語専攻以外の学生に対する 試み」

白井由美子（関西国際大学・非常勤）

本発表は、英語専攻以外の学生に、英語を読むことの楽しさを実感させ、また読むことからコミュニケーションにつなげていくという授業実践を紹介したものである。発表者は、関西国際大学人間行動学科対象の「総合英語」において、Graded Readers（英語を母語としない人用に読みやすく書き直した本）を用い、つぎのような活動を行わせた。

- a 話の内容を予想する：授業初回に、30分ほど黙読し、話の展開予想を各自テープに吹き込む。
- b 伝えたい場面を自分の言葉で説明する：黙読後、その日読んだ中で、自分が伝えたい場面を、自分の言葉を使ってテープ録音をする。
- c 主人公を描く：自分がイメージする主人公の絵を描き、主人公の様子を英語で表現する。
- d 疑問に思ったことを2点書く：自分が話の中で、疑問に思ったことを書く。
- e 朗読する：内容や筆者の意図することを理解した後、気持ちを込めて朗読する。
- f 本の宣伝をしてみる：出版社の職員として、読んだ本をラジオ番組で宣伝するつもりで録音する。

これらの活動の目的は、英語で作業させる、自然なインプットから自然なアウトプットにつなげる、読んだ内容をまとめる力を養成する、伝えることの喜びを教えるなどである。そして、授業においてこれらの活動を行った生徒の反応を報告している。まず、Graded Readers を利用した感想としては、「辞書なしで読めたことが嬉しかった」、「もっと知りたい、もっと理解したいという意欲がわいた」という好意的な反応が多かった。一方、朗読、批評といった活動に対しては、「他の人に指摘されて気づくこともあり、とても良かつ

た」という積極的な反応もあったが、一方で「聞かれるのは恥ずかしかった」という意見もみられた。また、本の宣伝をさせる活動については、「難しかったが、面白かった」、「興味を誘うような録音をすることは難しいと思った」というように、困難ではあっても興味をもって取り組んだ様子が報告された。

質疑応答では、生徒の評価方法、分からない単語の処理、またクラス内でさまざまな本を読んでいる生徒をどのように統合するかなどについて、フロアから質問が出された。（青木信之 広島市立大学）

研究発表・実践報告 1 - 2

「口頭タスクにおける repetition と planning の効果」

山川健一（安田女子大学）

Repetition に時間を与えた方がいいのかそれとも planning に与えた方がより良い結果を出すのかは授業現場でしばしば迷うことがある。発表者はこの疑問を解くべく大学生にミシガンテストを実施して等質の2つのグループ（repetition 用と planning 用）に分け、それぞれのグループを上位群と下位群に分けた。これらのグループに物語のナレーションと個人的なことを語るスピーチの2つのタスクを与えた。学生の音声を録音し、fluency、情報の量、accuracy、complexity の4つの観点から分析した。その結果 fluency と情報の量に関しては repetition に時間を使ったグループが統計的に優位に優れていた。しかし、accuracy と complexity については英語学力の影響を受けており、上位群が有意であった。ナレーションと個人的なタスクでは個人的なスピーチの方が accurate であったが、このタスクでは下位群の方が上位群より accurate であった。個人的なことを話す場合は使い慣れた安全な表現を用いる傾向があるのだろうか。上位群下位群のスピーチは

complexity の点からどのようなものであったのだろうか。興味のある研究であった。 (櫻井敏子 神戸松蔭女子学院大学)

研究発表・実践報告 2 - 1

「CGI を用いたディクテーション自動添削」

榎田一路 (安田女子大学文学部)

榎田先生のご発表の KD System は「サッと英作！」を含む、英語教師にとっては興味深い安田 CALL システムの一部です。要旨に書かれていたように教室で従来の方法でディクテーションを行うと様々な問題が生じます。学習者の中には何度も内容を聞きたい人や、学習者によっては読み上げた文章が聞き取れない部分が違います。しかし、大勢の学習者に対して個々への対応が困難だけであるばかりでなく、添削、採点とフィードバックが大きな負担になります。

このような問題を解決するために個人でも学習できる CGI を用いたシステムの開発を始めました。安田女子大学の CALL 教室が開設された翌年の 1998 年の夏に開発が始まりました。当初のシステムにはネットワーク型教材 (WWW のものを使用)、音声 (RealPlayer)、正誤判断プログラム (JavaScript) と入力した語句の正誤添削ができました。これで繰り返しディクテーションが聞けるだけでなく、添削作業が高速化されました。しかし、問題点としては教師が学習の結果や点数が把握できないのと答えがソースに書いてあるのでプログラミングのできる学生なら正解が分かります。また単語レベルでの間違いが把握できません。1999 から 2000 年に新しいプログラムを JavaScript ではなく CGI を用いたディクテーション自動添削システムを開発、2001 年に KD システムが誕生しました。

榎田先生のハンドアウトから KD システムの特徴は以下の通りです：

- ・ 答え合わせが何度でもできる
 - 学習者は、わかるまで、繰り返し聞き取り練習・答え合わせができる
- ・ 最終解答の提出時に、正解、学習者の解答、解説を同時に表示
 - 自分がどこをどう間違えたか明確に自己判断できる
- ・ 解答の自動保存機能
 - 不意のトラブルでブラウザが強制終了した時も、問題の続きを後日じっくりやりたい時も解答の復活ができる
- ・ 教授者は「ティーチャーズアシスタント」で手軽に問題作成
 - 大量の問題が簡単に作れ、問題の手直し、解説の挿入も自由自在に行える
- ・ 学習者の学習データを自動的に記録・保存
 - 教授者は、個人別学習データも、問題ユニット別成績順データも閲覧できる」

この KD System は英検や TOIEC 対策の「総合英語」、「英語聴解演習」や「英語発音演習」で使用されています。90 分のクラスで 20-30 分がコンピュータを利用した発音練習です。学習者は自宅からもアクセスし、勉強できます。大きな利点はこのネットワーク型コンピュータ教材はインタラクティビティをフル活用し、学習者個々のペースに合わせたディクテーションが練習できることです。デモンストレーションで実際に試してみることができ、非常に興味を持ちました。

（野口ジュディー 武庫川女子大学）

研究発表・実践報告 2 - 2

「英語教育の場におけるデジタル技術を利用した音声波形編集に関する実践的考察」 山本勝巳（関西福祉大学）

近年のコンピュータを含むデジタル機器の発達により、音声の記録及び編集は大きくその姿を変えてきた。以前は、実際にテープを「切り貼り」したり、オーディオ機材を複数台並べて、再生・停止、録音・停止、とタイミングを計りながらスイッチを押すといった気の遠くなるほど手間のかかった編集作業が、コンピュータ上で、容易に、しかも音質を劣化させることなく行うことが可能になった。本発表においては、実際にアナログメディアに記録された音源をデジタルデータとして取り込む際の手順、及び、コンピュータ上での音声編集の方法が、(1)音声データのデジタル化 (2)サウンドファイルの基本 (3)音声編集作業という項目にそって示された。

(1)の項目においては、実際に機材をどの様に接続すればよいか、また、機材の特色などについて、いわゆる「機械音痴」と言われる人にもわかりやすいように、写真等を織り交ぜ、かなり具体的で、詳しい説明がなされた。(2)の項目では、デジタルデータとして音声を利用する際に最も問題となる、音質とデータ量の兼ね合いについての説明がなされた。アナログ音声をデジタル化する際には、サンプリング周波数、量子化ビット数、チャンネル数という3つの値がその音質を左右する。サンプリング周波数(単位:Hz)とは、連綿と続く音声を、1秒間に何回取り込むかを示すもので、この数値が大きい程、ピッチの情報が正確にデータに反映される。量子化ビット数(bit)とは、どれだけ小さな単位に音圧を量子化するかを示す値。チャンネル数とは、モノラルかステレオかを示すものである。これらの値をすべて掛け合わせることで、音声ファイルとしてのデータ量が決まるため、音質とデータの大きさは反比例する事になる(CD音質で1分間10.584MB)。従って、音声分析用のデータであれば、音質を重視し、リスニング教材として用いるのであれば、記録メディアや、コンピュータの負担を考え、耳で聞いて支障のない程度まで、音質を下げるといったように、用途に応じた使い分けをする事になる。また、サウンドファイルの形式についてもいくつか紹介された。(3)の項目においては、実際に簡単に入手できる音声編集ソフトを使い、コンピュータ上で音声を聞き易くする加工などが、簡単なマウス操作で行なえることが示された。

これまで、「コンピュータでデジタル音声編集」などといわれると、どこかにその必要性を感じつつも、敬遠されがちな分野ではあったが、本発表のように、普段家庭で使う程度の Windows / Mackintosh の知識で、音声編集は可能だと言うことが示される機会が増えれば、少しずつその敷居は低くなり、より多くの人々が、その恩恵を受けられるようになるであろう。(菅井康祐 大阪電気通信大学非常勤)

「会場校を引き受けて」

松岡博信（安田女子大学文学部英語英米文学科）

11 月 9 日（土）2002 年度関西支部秋季研究大会が安田女子大学（広島市）を会場として開催された。会場校としての取り組みは、5 月 26 日の同志社女子大学における春季大会会場で、運営委員の村上久恵先生（広島大学）が本学を会場としてご推挙くださったことに始まる。その 2 日後にはもう事務局の吉田晴世先生から初メールを頂き、5 ヶ月以上に渡る数え切れないほどのメール交換が始まった。実は、平成 11 年度の秋季研究大会も本学での開催を望まれたが、学内編入試験と日程が重なり、広島市立大学に開催をお願いした経由がある。そういうこともあって、今度こそはという気持ちが私たちにもあり、また、3 月に CALL 教室が 2 教室ともリニューアルしたこともあって、そのお披露目という意味でも、開催校として是非頑張って大会を成功させたいという意欲に、私たち 7 名（平均年齢 37 歳）の CALL スタッフは満ちていた。

本学の CALL は、運営開始から 5 年以上を経ているが、4 年連続で公開講座を行っており、またこれまで広島 CALL 研究会など各種の研究会会場にもなっている。会場校として経験は積んでいるつもりであったが、メジャーな学会は始めてであり、私たちには大きな期待と同時に不安もあった。

当日は、あいにくの雨で参加者の出足が心配されたが、朝早くから 50 名を超える熱心な参加者を得て、本学教員および学生参加による「CALL 公開授業」、早期英語教育研究部会による「小学校における英語活動」に関するシンポジウム、研究発表 4 件、そして広島大学大学院の小篠敏明先生の「英語教科書の質的および量的分析」と題した講演が行われた。大会終了後に行われた学内での懇親会も多くの参加者を得て、大変和やかな楽しいものであった。私たち 7 名の心も無事に研究大会を開催できたという安堵と充実感に満ちており、大会関係者から過分なお褒めの言葉を頂き、「会場校を引き受けてよかった」と心底思った。

今回の会場運営に当たり多くのご協力、ご助言を頂いた。心から感謝の意を表したい。特に、摂南大学の吉田晴世先生、広島市立大学の青木信之先生、そして、お忙しい中、入念な準備に基づいた講演をしてくださった広島大学大学院の小篠敏明先生に衷心より謝意を表したい。

EOT